（1）世界文化遺産提案のコンセプト

①資産名称・概要

○資産名称…妻籠宿・馬籠宿と中山道（『夜明け前』の世界）

○概要

近世交通システムの具現　五街道の一つ中山道は、参勤交代の大名や日光例幣使が通る政治の道であり、米や塩干物などが流通する経済の道であり、江戸や京大坂の文物が行き交う文化の道であった。妻籠宿と馬籠宿は、慶長６年(1601)に江戸から４２番目と４３番目の宿場として制定されたが、それは単に街道と宿場を定めただけでなく、立場茶屋（旅人の休息施設、荷物の継立所）や間の宿（宿と宿の間にあって旅人の便宜を図ったところ）といった安全で快適な旅を保証する施設の整備にまで及んだ。しかしこうした宿場と街道という近世に繋がる景観のほとんどは、昭和３０年代半ばからの高度経済成長に伴う道路改修などによってわが国から失われてしまった。幸いと言うべきか妻籠と馬籠は、国道や鉄道という近代交通網から外されたことで、近世交通システムの景観がほぼ残された。また宿場を維持するために人足や伝馬を供給する重要な地区であった在郷の景観も、与川地区、妻籠地区の渡島・上在郷・大妻籠、馬籠地区の峠・荒町などに残されており、このように完結した地域は他に見られない。まさにわが国にとって貴重なエリアといえよう。

妻籠宿・馬籠宿の歩み　昭和２２年(1947)１１月１５日、馬籠宿本陣跡に藤村堂（現「藤村記念館」）が地元のボランティアによって建設・開館した。これは馬籠出身の近代文学の巨匠島崎藤村を顕彰する、わが国文学館の先駆けであった。馬籠は以降、藤村文学研究の拠点として現在に至っている。前年の昭和２１年９月８日には、妻籠に全国で最初の公民館が開館した。公民館活動という先駆的な文化活動を経験した人々が、昭和３０年代後半になると全国で最初の町並み保存に取り組んでいった。この頃世界的にもウイリアムスバーグの保存やマルロー法の制定など、建物を面として保存する動きが始まっていた。昭和４３年(1968)から保存事業に着手した妻籠には、馬籠峠を越えて観光客が訪れるようになり、妻籠と馬籠のエリアは全国でも有数の観光地になった。妻籠宿とその周辺は、昭和５１年(1976)９月４日に全国で最初の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

日本を代表する歴史小説『夜明け前』　島崎藤村の畢生の大作『夜明け前』は、嘉永６年(1853)６月黒船が浦賀に来航しペルーが幕府に開国を迫ったときから、明治１９年(1886)１１月の主人公青山半蔵（藤村の父がモデル）の死までの、明治維新を中にした３３年間の歴史を背景に、馬籠・妻籠を中心舞台として当時の木曽の人々の生き様や文化・風俗を小状況に、天狗党の西下、和宮の降嫁、幕府追討軍の東下、鉄道建設の外国人の調査行などの大状況を交錯させた歴史小説である。文芸評論家篠田一士はその著『二十世紀の十大小説』(Ten Greatest Novels of 20th Century) で、ブルーストの『失われた時を求めて』やジョイスの『ユリシーズ』などの世界文学に優に比肩する唯一の日本文学として『夜明け前』を論じ、昭和６２年(1987)にはuniversity of Hawaii PressからWilliam E. Naff 教授の英語訳“Before the dawn ”が出版された。その『夜明け前』の世界が息づいているのが妻籠・馬籠である。両宿は人的にも関係が深く、両本陣の島崎氏は同族で幕末にも婚姻関係を結び、藤村の『初恋』の詩に詠われた〈おゆふ〉は妻籠宿脇本陣に嫁いでいる。